

# 無法松の一生

映画文学人生論

原作：岩下俊作『富島松五郎伝〜いい奴』（1939年）

監督：稲垣浩（1943年）（1958年）

出演：富島松五郎 板東妻三郎 三船俊郎 脚本：伊丹万作  
結城重藏 月形龍之介 笠智衆 撮影：宮川一夫  
吉岡小太郎 永田靖 芥川比呂志 音楽：西悟郎  
吉岡良子 園井恵子 高峰秀子 團伊玖磨

俺の心は汚い、奥さんにすまん！

岩下俊作『無法松の一生』は昭和四十年までに四度、映画化されている。そのうち、稲垣浩監督による昭和十八年版と昭和三十三年版の映画を比較しながら観た。

昭和十八年版は戦争中につくられたもので、内務省の検閲によってカットされた場面があり、さらに戦後も占領軍による検閲で封建的とみなされた場面がカットされている。いわばズタズタに切り裂かれたフィルムの残骸だが、むしろ省略のよききいた上質の作品という印象も受ける。

小倉の車ひき松五郎は、日露戦争の英雄奥大將をおまえと呼んだり、警察の撃剣師範や芝居小屋の木戸番と喧嘩するような荒くれ者だが、陸軍大尉吉岡小太郎の知遇を受け、大尉の死後は、未亡人と一人息子のためには献身的に尽くす。

しかし、その息子が成長して、中学を卒業し、熊本の高等学校に進学すると、これ以上、吉岡家に入入りするのはよしたほうがよいと思うようになる。

「奥さん——。おれは帰ります。——もうおめにかかるとはあるまい」

「どうしてですか、言うてください、どうしてそんなことを——」

「奥さん——」「おれの心はきたない——」  
奥さんにすまん！

# 無法松の一生

映画文学人生論



と無法松が未亡人に言って立ち去るのは物語のクライマックスの場面だが、昭和十八年版は検閲でカットされた。前線で戦っている兵士たちの士気をくじくおそれがあるという理由による。

念のため原作を読んでみると、「奥さん、俺は淋しうて、つらい。奥さん、俺は……」と言いかけて、突然、松五郎の逞しい掌が夫人の華奢な手をがっしり把んだが、直ぐに「奥さん、すまん」と叫ぶと、身を翻して飛び出した、となっている。原作のほうがきわどい描写だと思うが、原作は発禁処分にはなっていない。

それはともかく、身分違いの恋のやるせなさを強調するこのシーンはカットしてもよいと私は思う。ほんとうのクライマックスはその前の小倉祇園祭で、無法松が祇園太鼓を打つ場面だからだ。当時すでに祇園太鼓の正式な打ち方はすたれていた。そこへ無法松が「ちよつとまねごとをやってみようか」と、飛び入りで山車の上にあがり、太鼓を打ち始める。蛙打ちからはじめて、流れ打ち。勇み駒、そして最後に、暴れ打ち。

その太鼓の音を聴いていると、これこそ古風な日本人の心だ、言葉はいらない。淋しうて、つらいこともあったかもしれないが、人力車の回転とともに明滅する無法松の一生は不幸ではなかったと観衆は思わされてしまう。

無法松祇園太鼓の暴れ打ち